

在米日本人留学生のソーシャル・サポート・ネットワーク(1)

— 事前セッションによるソーシャル・スキル人爲学習者における検討 —

○高濱 愛¹⁾ 田中 共子²⁾

(¹⁾一橋大学大学院法学研究科 (²⁾岡山大学社会文化科学研究科)

キーワード: ソーシャル・サポート・ネットワーク、日本人留学生、米国留学、ソーシャル・スキル

【目的】 日本人短期留学生の留学後の様子を調べると、大きく分けて留学を楽しんでいるグループと楽しんでいないグループの2種類に分かれたという(Takahama, Nishimura and Tanaka, 2008)。留学を楽しんでいるグループは、ソーシャル・スキルを活用してソーシャル・サポート・ネットワークを形成し、サポートを留学中の問題解決に役立てていた。このグループはソーシャル・スキルを自力で身に付けた「スキル自然学習者」といえるが、筆者らは、スキルを事前に学習してから留学するという心理教育を試みてきた。こうした人爲学習者の追跡調査は、彼らが学んだスキルを留学先で友人作りに役立てていることを示した(高濱・田中, 2009)。この結果は、留学先の文化に適したスキルがあれば留学先で新規の友人形成が促され、サポート供給の充実をもたらすとの仮説を支持する。本研究では、スキル人爲学習者たちの、留学中におけるソーシャル・ネットワークの状況をより詳しく探り、どのようなネットワークを構築し、どのようなサポートを得ていたのかを、実証的に描き出すことを目的とする。

【方法】 <調査協力者> 渡航前予備教育として、アメリカン・ソーシャル・スキル学習セッションに参加した日本人大学生5名(S1, S2, S3, S5, S6)。彼らは渡航前に3日間に渡る合計12時間のセッションに参加して、主張・交渉等8個のスキルを学んでから、約1年間交換留学生として米国の大学で学んだ。<調査手続き> 留学中の2時点における状況を調査した。(1)留学中調査(留学初期について): 渡米後3~4カ月が経過した留学初期の段階に、第一筆者が研究協力者(S1, S2, S3, S6)の留学先を尋ね、質問紙を手渡して記入してもらい、それに即して留学初期の状況を語ってもらう半構造化面接を実施した。S5は、面会の都合がつかず郵送により質問紙を送付・回収した。(2)帰国後調査(留学後期について): 帰国後2~3カ月経過した時期に、協力者の在籍する日本の大学において、質問紙を手渡して記入を依頼し、S1, S2, S3, S6には半構造化面接を行い、留学後期の状況を振り返ってもらった。S5は、面会の都合がつかず郵送により質問紙を送付・回収した。<質問項目> 田中(2000, p64)のソーシャル・ネットワーク構成員に関する質問項目を用いた。5人以上最大10名までのネットワーク構成員を略号で挙げてもらい、各構成員の性別・年齢(4種類)・国籍(2種類)・回答者との関係(7種類)・援助期待(3件法)・関係の満足度(4件法)・エクイティ(3件法)・接触回数(5件法)を尋ねた。なお今回独自の項目として、話題(2種類・2件法)・既知性(2種類)・近接性(2種類)についても尋ねた。

【結果】 ネットワーク構成員は平均9.0名であった。その国籍をみると(Table1)、留学初期・後期において、アメリカ人の割合が半数以上と最も高く、日本人割合は1~2割と最も低い。アメリカ人構成員との関係とサポートに注目すると(Table2)、同年代の学内者の割合が高く、初期にはコンパニオンシップ、後期には相談とコンパニオンシップのサポートが、特に期待できる関係である。留学初期から、既知ではない新規の関係を育てて、身近な友人を作っており、その満足度もかなり高い。後期になると、一般的な話題のみならず個人的な話題を話せる構成員の割合も、上昇する傾向にある。

Table 1. 留学初期と後期のネットワーク構成員の国籍

	日本人	アメリカ人	それ以外	合計
留学初期	15.6	55.6	28.9	100.0
留学後期	11.3	54.7	34.0	100.0

Table 2. アメリカ人ネットワーク構成員との関係性

項目		①初期	②後期
属性	男性	44.0%	58.6%
	女性	56.0%	57.6%
	同年代	84.0%	82.1%
	学内	60.0%	72.4%
サポート	a. 勉強	24.0%	41.4%
	b. 相談	36.0%	79.3%
	c. 楽しむ	72.0%	69.0%
	d. 物やお金	56.0%	31.0%
	e. 情報	52.0%	58.6%
関係性1	関係満足度	96.0%	58.6%
	相互依存度	24.0%	51.7%
	接触頻度	56.0%	75.9%
会話	a. 個人的	60.0%	86.2%
	b. 一般的	76.0%	100.0%
関係性2	既知性	28.0%	13.8%
	近接性	76.0%	79.3%

【考察】 今回のスキル人爲学習者のネットワークをみると、アメリカ人の割合が最も高く、留学初期からホストとのネットワーク構築に積極的に取り組んでいたことが分かる。そのネットワークからは多様なサポートが得られており、関係満足度が高く、質の高いネットワークを構築していたといえる。同じ協力者における留学中の語りの分析(高濱・田中, 2009, p113)からは、友人を作るには積極的に「自分からいかなないとダメ」という姿勢をスキル学習時に得ており、実践していると認識していたことが示されている。そのため、対人関係を活用した適応方略を取りやすかったと考えられる。同世代の学内の友人と楽しんだり相談したりする関係を作っており、留学先における友人の量も質も少ない「希薄型」(Takahama ら, 2008)の該当例は見あたらないと思われる。

【引用文献】

Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008). "The influence of social skills on getting social support for adolescents during study abroad: A case study of Japanese short-term exchange students" *Journal of International Student Advisors and Educators*, 10, pp.69-84.

高濱愛・田中共子(2009)「在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用—留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合—」『留学生交流・指導研究』Volume 11, pp. 107-117.

田中共子(2000)『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポート』ナカニシヤ出版

(たかはま あい・たなか ともこ)